

最小限の切開で精度の高い人工膝関節置換術を実施

大越康充 院長



おこし・やすみつ / 岩手医科大学卒業後、北海道大学医学部附属病院整形外科入局。函館中央病院整形外科医長などを経て2007年6月に開院。医学博士、日本整形外科学会認定整形外科専門医、日本整形外科学会スポーツ医。



前田龍智副院長



鈴木航整形外科手術部長

道南初の膝関節専門クリニックとして、大越康充院長はじめ、整形外科医3人体制で地域を支えている。

特に変形性膝関節症における人工膝関節置換術に長け、昨年

数ランキングでは道内3位。そのほか靭帯断裂形成術でも同5位と実力は本物だ。

この実績は、低侵襲かつ精度の高い執刀技術への信頼に他ならない。同院でおこなう人工膝関節置換術は、MISと呼ばれる最小侵襲手術を採用。従来、約20センチも切開していた手術を10センチ程度で実施している。MISは皮膚だけでなく、筋肉や靭帯

度は約214例を執刀。同置換術の手術

質の高い手術で「より早く、より早い社会復帰・スポーツ復帰」を目指す

の切開も最小限で済むため、術後の回復が早い

利点もあり、近年施術する医師が増えている。その一方、切開を最小にするがゆえに十分な術野を確保できず、手術の精度が落ちるリスクもある。そこで同院では、課題となっていた術野を十分に確保することができるよう医療機器を独自に考案。最小限の切開でも極めて質の高い手術を遂行している。この評判を聞きつけ、札幌や旭川など道内各地から患者が訪れている。

また「人工膝関節置換術は、できるだけ置換部が少ないほうがリスクが少なく、術後の結果もよい」という方針のもと、症状に応じて一部分を人工関節に置換する単顆置換術、病変部が2カ所でも置換できる二顆置換



駐車場は50台分確保

術も実施。2011年には、医療器具メーカーと共同で膝蓋骨部分の人工関節も開発した。「これまで膝蓋骨と呼ばれる膝の皿の部分のみの病変に対するよい人工関節はなかったため、全置換術がおこなわれてきましたが、新しい人工関節の開発により、傷んだ膝蓋骨のみを置換できるようになりました」と大越院長。この革新的な人工関節に興味を持つ医師が全国から函館に訪れている。

「手術はあくまで最終手段。軽中度の患者には、痛みを評価しながらヒアルロン酸注射やリハビリ療法、インソールの改善など最大限の保存療法を提供しています」(大越院長)